OT フェスティバルへの出展により IADL 向上に繋がった症例

～過去に作成した作品出展の効果～

氏名：高野　友美
所属：ゆきよしクリニック
KeyWords：通所リハビリテーション、場、自信

【はじめに】今回「バスに乗りたい」という目標を持った症例を担当した。一人で買い物に出かけるほどの身体機能であったため、自信の獲得を目標とし模擬動作練習を実施したが、実際の動作には繋がらなかった。しかし、OT フェスティバルへの関わりを行ったところ、短時間通所リハビリテーション（以下、短時間通所リハ）利用時の様子に変化が見られ、バスに乗るという行動に繋がった。OT フェスティバルを介した関わりが症例にどのような影響を及ぼしたかを考察する。

【事例紹介】69 歳　女性　疾患名：両先天性股関節脱臼　右変形性膝関節症　既往歴：不整脈・心房細動　骨粗鬆症　介護保険：要支援 1。短時間通所リハ（週 1 回）のみ利用。社会的背景：息子との二人暮らし。

【作業療法評価】身体機能：両足部から下腿にかけて浮腫があった。足関節の軽度外反変形により、歩行時に右足関節内側部に痛みが見られた。精神機能：人との関わりに対しては消極的で、職員の声かけを待つような受身的な様子が見られた。ADL：Barthel Index：100／100 点。屋内移動は独歩、屋外移動は T 字杖使用、階段昇降は手すりを使用して可能だった。IADL：Frenchay　Activities　Index 自己評価表：19/45 点。食事の用意・片付け、洗濯、掃除は全て行っていた。買い物は、自宅から 10 分かけてスーパーまで歩いて行っていた。公共交通機関の利用はなかった。

【介入の基本方針】バスを利用することを目標とし、身体機能の維持と模擬動作練習による動作への自信の獲得を基本方針とした。

【作業療法実施計画】週 1 回、20 分の個別作業療法を実施した。身体機能の維持として、下肢体幹のストレッチ・筋力訓練を実施し、バス乗降動作への自信の獲得として階段を利用し、模擬動作練習を実施した。

【介入経過】身体機能維持として下肢体幹筋力訓練、自信の獲得としてバス乗降動作練習を実施した。動作は安全に行なわれ、痛みの訴えも見られなかった。しかし、日常生活場面での右足関節内側部の痛みの訴えは続き、実際にバスに乗るという姿勢は見られなかった。この頃、OT フェスティバルへの出展が決まり、症例にも出展を依頼した。出展作品に対してよいイメージを持っていたにも関わらず、症例は強い不安を見せた。そのため、展示会の説明とともに不安を取り除けるよう場を提供したが、不安を残したまま作品展示会を迎えた。症例は実際に展示の様子を見ることができなかったため、後日当院にて展示会写真を展示した。この時期から職員や他利用者との会話が増え、短時間通所リハ利用時の様子に変化が見られるようになった。右足関節の痛みの訴えも減少し、自身の体を理解しようとする姿勢が見られた。その後、姉の協力を得てバスに乗ることができたと症例から報告を受けた。

【結果】身体機能：右足関節の痛みの訴えが減少した。精神機能：来院時、退所時は全職員に聞こえるような大きな声で挨拶をするようになり、自身の意思を他者に伝える機会が増え、表情も豊かになった。ADL：Barthel Index：100／100 点。 IADL：Frenchay　Activities　Index 自己評価表：20/45 点。公共交通手段の利用として、一度姉とバスを利用した。

【考察】 症例は、OT フェスティバルへの出展により利用時の様子が変わり、目標達成へと繋がった。症例の出展に対する強い不安は過去に作成した出展作品に自我が反映されており、自信のない自分が人前に出ることに対する不安だったと考える。しかし、自我が反映された作品であったからこそ作品展示会後の写真や職員のフィードバックという場が①自己受容の中で自身を確かめる試行の機会②有能感・自己愛を満たす機会となり、退院後は経験することが少なく失われてかけていた自信を取り戻し、より現実的な生活世界に向けた歩みに繋がったと考える。